

第8章 原の辻遺跡出土鉄器

宮本一夫

1. 鋳造鉄器

708・709は鋳造鉄斧刃先である（図119、図版73）。708は1953年第2次調査時の採集品である。709は1953年第2次調査の第4トレンチE区から出土している（図20）。この地点は壱岐市調査の1号土器溜まりに相当し（長崎県壱岐市教育委員会2009）、それに伴うものであるかもしれない。1号土器溜まりは須玖I式と須玖II式の弥生中期の土器から構成されており、この鋳造鉄斧もその時期のものであろう。710は出土地不明の鋳造鉄斧の胴部側面部分である（図119、図版71）。銎部断面は長方形をなし、燕系の鋳造鉄斧である可能性がある。708・709の鋳造鉄斧刃先と710の鋳造鉄斧は、同一器種のものであり、燕や細竹里・蓮花堡類型あるいは朝鮮半島西南部の粘土帶土器文化に伴う鑓（宮本2021・2023）に相当するものの可能性がある。第9章の金属学的調査によれば、708・709は焼なましがされているところからみても、鑓である可能性が高い。

722は、端部が突線状に盛り上がるもので、鉄鎌などの鋳造製品の一部であろう（図123、図版71）。

2. 鍛造鉄器

（1）袋状鉄斧（図120・121、図版71・74-1・2）

712～715は、鍛造の袋状鉄斧である。712・713は、袋部と刃先の間がやや段状をなすのに対し、

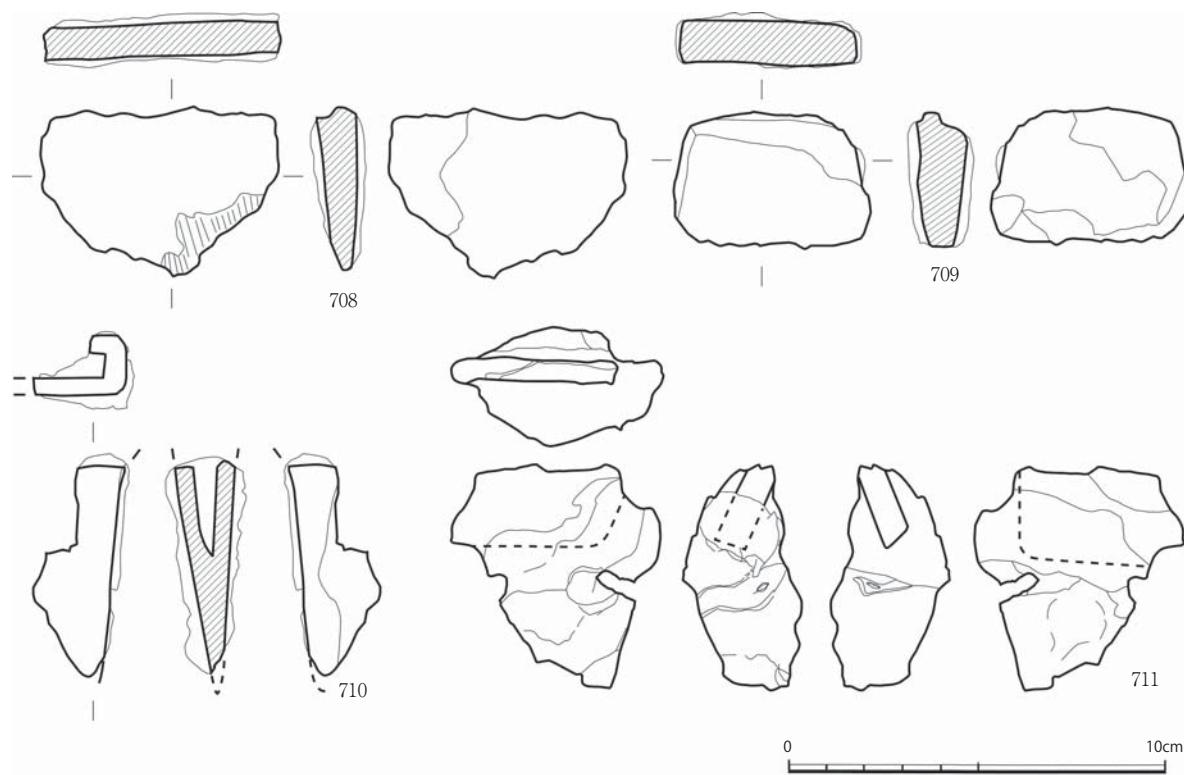


図119 原の辻遺跡出土鉄器（1）

表6 原の辻遺跡出土鉄器集成表

番号	調査年度	トレンチ	調査区	遺構・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
708	1953		採集		鋳造鉄斧	4.5	6.3	1.0	92.4
709	1953	第4	E区		鋳造鉄斧	3.5	5.2	1.4	105.2
710					鋳造鉄斧	5.7	2.3	1.5	32.4
711	1953	第4	H区		鉄片	1.7	4.4	0.6	76.9
712	1951	第1	f区		袋状鉄斧	7.7	3.7	1.7	63.8
713	1961		採集		袋状鉄斧	6.7	4.5	1.4	97.9
714	1951	第1	p・q区	内環濠?	袋状鉄斧	7.8	3.6	1.8	69.9
715	1961	第1	J区		袋状鉄斧	5.2	2.1	1.0	27.9
716	不明				袋状鉄斧	8.0	4.1	2.3	127.4
717	不明				袋状鉄斧	6.0	2.9	1.0	30.0
718	1953	第2	Q区		鋤先	9.6	8.8	1.4	141.5
719	1953				鋤先	7.9	9.7	1.5	126.8
720	1953	第2	Q区		鋤先	4.9	6.9	1.3	37.3
721	1951				板状鉄斧	13.4	6.3	0.4	143.9
722	1961		採集		鋳造鉄鏟	3.6	3.1	0.7	17.1
723	1951	第1	h区		釣針	2.6	2.2	0.5	2.7
724	1961	第1	Y区	上層	釣針	1.9	1.1	0.3	0.6
725					鎌	3	3	0.6	12.1
726	1961				鎌	4	4.2	0.4	31.5
727	1954	第1	A区		鎌	8.2	2.8	0.2	46.4
728	1961				劍	8.3、7.2	3.3、3.6	0.3	81.3
729	1961	第5	H区	黒土層	鎌	5.5	1.8	0.5	7.0
730	1953	第2	U区		鎌	3.8	1.9	0.5	5.0
731	1953				刀子	7.0	1.7	0.5	41.1
732	1961	第1	S区	下層	刀子	7.0	3.2	0.5	44.2
733	1953	第2	R区		鉄片	6.0	2.0	0.3	9.9
734	1953	第2	Q区		鉄片	4.6	1.7	0.3	8.6
735	1953	第4	G区		鉄片	1.7	1.7	0.3	3.7
736	1953	第2	O・P区		鉄片	5.3	2.9	0.2	9.2
737					鉄素材	3.7	2.0	0.4	6.1
738	1953	第2			鉄素材	3.6	1.2	0.4	4.1
739	1953	第2	E区		鉄片	2.4	2.2	0.2	2.7
740	1961	第1	L区	上層	鉄素材	2.5	2.4	0.4	9.2
741	1961	第5	C区		鉄素材	5.9	3.8	0.8	91.5
742					鉄素材	3.6	2.6	0.5	27.3
743	1953	第2			棒状鉄素材	10.9	1.2	0.7	30.5
744	1953	第2	P区		棒状鉄素材	7.1	7.1	0.7	13.7
745					棒状鉄素材	5.0	1.2	0.5	16.0
746	1953	第4	採集		鑿状鉄製品	7.5	1.5	1.6	56.3
747	1953	第2	S区		棒状鉄素材	2.9	1.5	0.6	6.7

714・715は袋部と刃先がほぼ直線をなすものである。朝鮮半島東南部の鍛造鉄斧では、前者から後者へと変化するものと考えられ（宮本2021・2023）、北部九州の鍛造鉄斧も朝鮮半島東南部のものと何らかの関係があるとすれば、前者から後者への変化が想定できる。712・714・715は、1951・1961年の第1次・第5次調査第1トレンチの内環濠ないしその付近から出土しており、出土地点は比較的近接している。したがって、弥生中・後期のものということができるであろう。

716・717は原の辻閨縁遺跡出土と表記されていたが、1954年の閨縁遺跡の調査日誌にはこれら鉄器の出土の記載がなく、閨縁遺跡出土品とは認定できない。そこで、原の辻遺跡出土の不明鉄器として取り扱う。ともに鍛造の袋状鉄斧である。716はほぼ完形であるが、717は破片で、袋状の折り曲げ部分も欠損している。

(2) 鋤先（図122、図版71）

718～720は鋤先である。岡崎敬が報告した3例（岡崎1956）が、これらにあたる。縦長長方形タイ

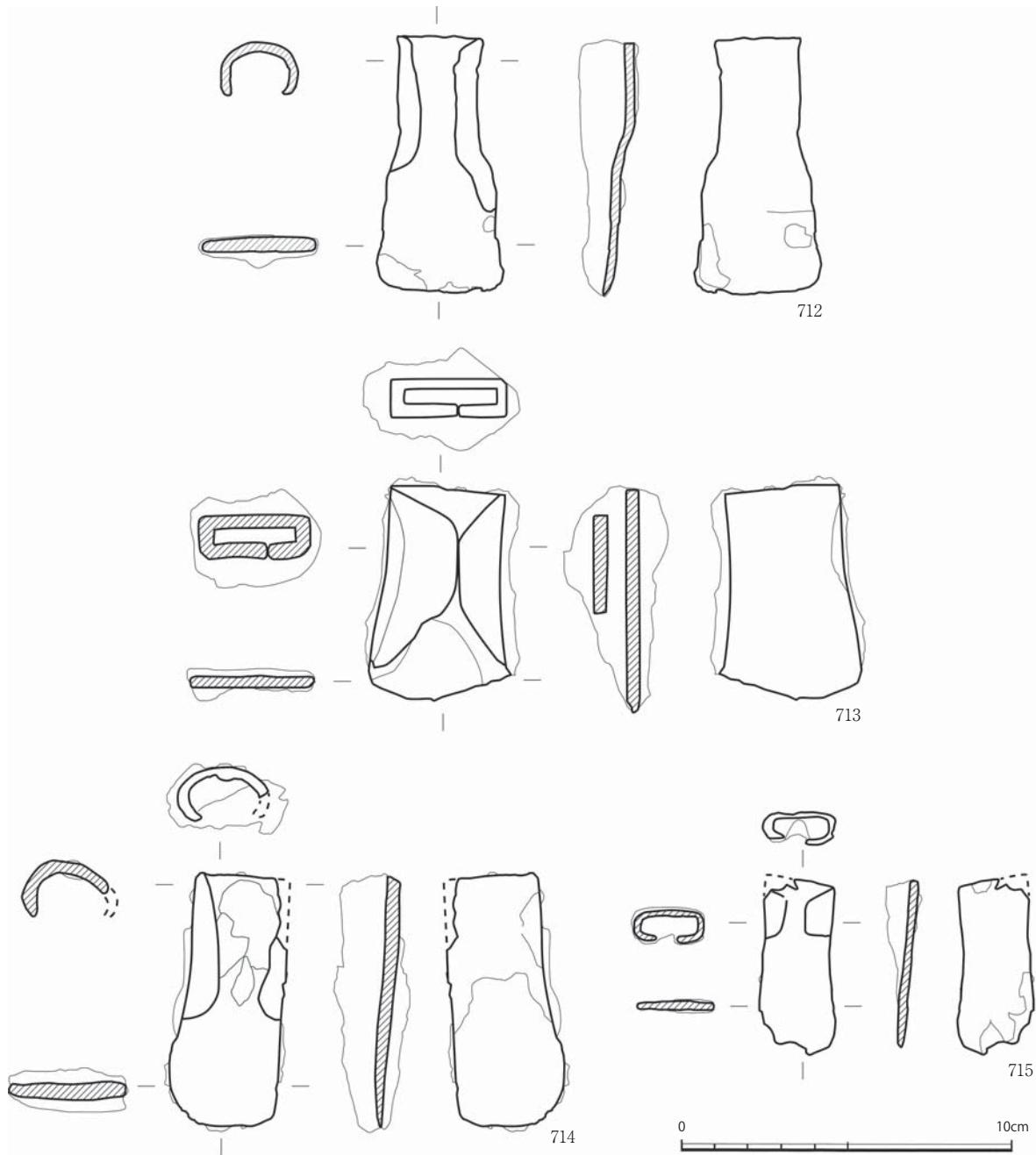


図120 原の辻遺跡出土鉄器（2）

のもので、川越哲志の分類のA 1類にあたる（川越1993）。

（3）板状鉄斧（図123、図版71）

721は、岡崎敬が鉄素材と考えたものであるが（岡崎1956）、ここでは板状鉄斧と呼んでおく。刃先部分がないので斧であったかは不明であるが、用途的には鉄素材の可能性が高いものである。

（4）鎌（図123、図版71）

725～727が鉄鎌と考えられる。725は基部で折り返し部が認められるが、破損しており、基部の幅や形は不明である。また、刃先の形態も不明であり、折り返しが右にあるのか左にあるのかは不明と言えよう。726は比較的幅広であり、弥生時代のものであろう。前者は出土地不明であるが、後者は

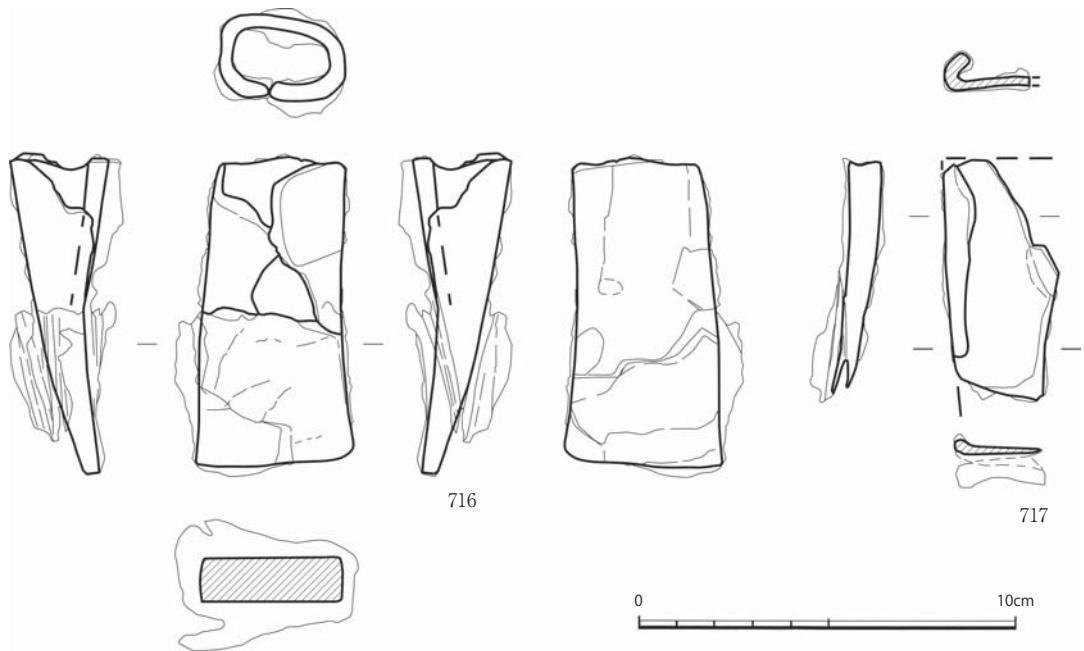


図121 原の辻遺跡出土鉄器（3）

1961年の第5次調査のもので、弥生時代層出土のものと思われる。727は1954年第4次調査第1トレンチA区出土の鉄鎌である。鉄鎌は弥生時代のものに比べ幅狭である点と、A区からは古墳時代前期の土器も出土しているところから、727の鉄鎌は古墳時代前期のものであろう。

（5）釣針（図123、図版71）

723・724が釣針である。724は1961年第5次調査第1トレンチY区出土で、内環濠に相当し、環濠内出土物である可能性がある。723も1951年の第1次調査出土のものであり、724の出土地点に近いところで出土した可能性がある。

（6）武器（図124、図版71・72）

728は鉄剣と考えられるものである。断面は鎬をもたないレンズ型をなし、厚さが3 mmと薄く、北部九州の在地産のものであろう。

729・730は有茎鉄鎌で、両者ともに茎部分が遺存している。729は1961年調査の第5トレンチのH区から出土している。第5トレンチは、当初A区～G区が設定され、さらに南側に拡張したトレンチがH区であり、外環濠に相当する可能性がある。

731・732は刀子である。両者ともに脊の厚さが5 mmと比較的厚く、刀子というよりは大刀である可能性がある。732は1961年第5次調査の第1トレンチS区下層で出土している。これは内環濠の下層に相当し、弥生中期のものである。素環頭大刀などの舶載品である可能性があろう。

（7）鉄片（図125、図版72）

733～736・739は鉄片である。それらは厚さが2 mmと薄いもので、鉄片とした。それらはすべて1953年の第2次調査のものであり、集落の中心地がから出土したものである。733・734・736は、第2次調査第2トレンチのO区～R区にかけて出土している。原の辻遺跡ではこれまで鍛冶炉は発見されていないが、多くの鉄片がまとめて出土しているところから、近くに鍛冶炉が存在していた可能性は高い。

（8）鉄素材（図119・125・126、図版72・73）

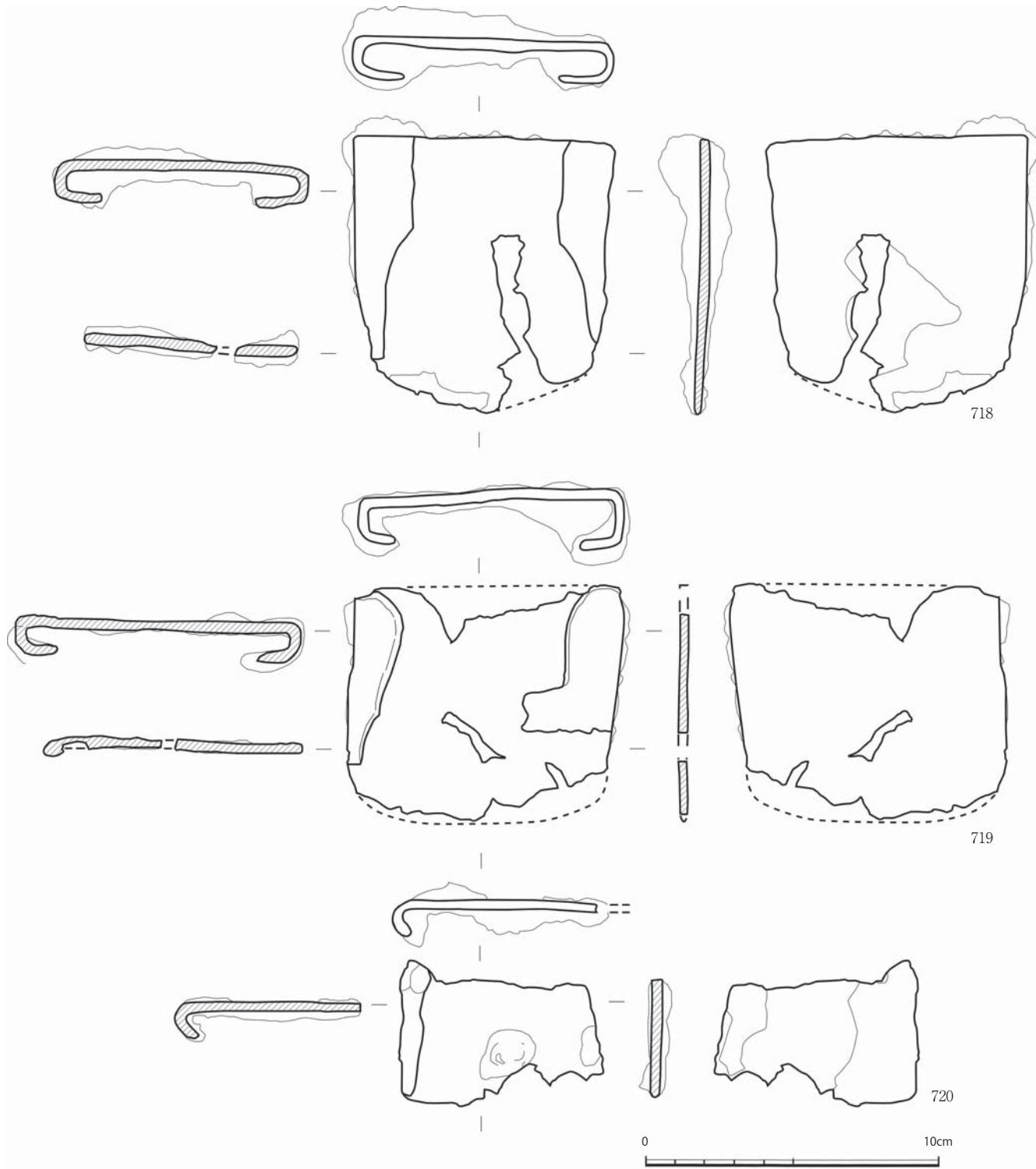


図122 原の辻遺跡出土鉄器 (4)

711は、当初スラッグの可能性もあると思えたが、第8章のX線CT調査の結果、鉄板が完全に腐食化して土器片とともに土で覆われたものであった。板状鉄素材の可能性がある。740は厚さが4mmと比較的厚く、鉄素材の可能性がある。741は厚さ8mm、742は厚さ5mmとさらに厚い板状の鉄器であり、鉄素材である。741は1961年第5次調査の第5トレンチのC区から出土している。こ

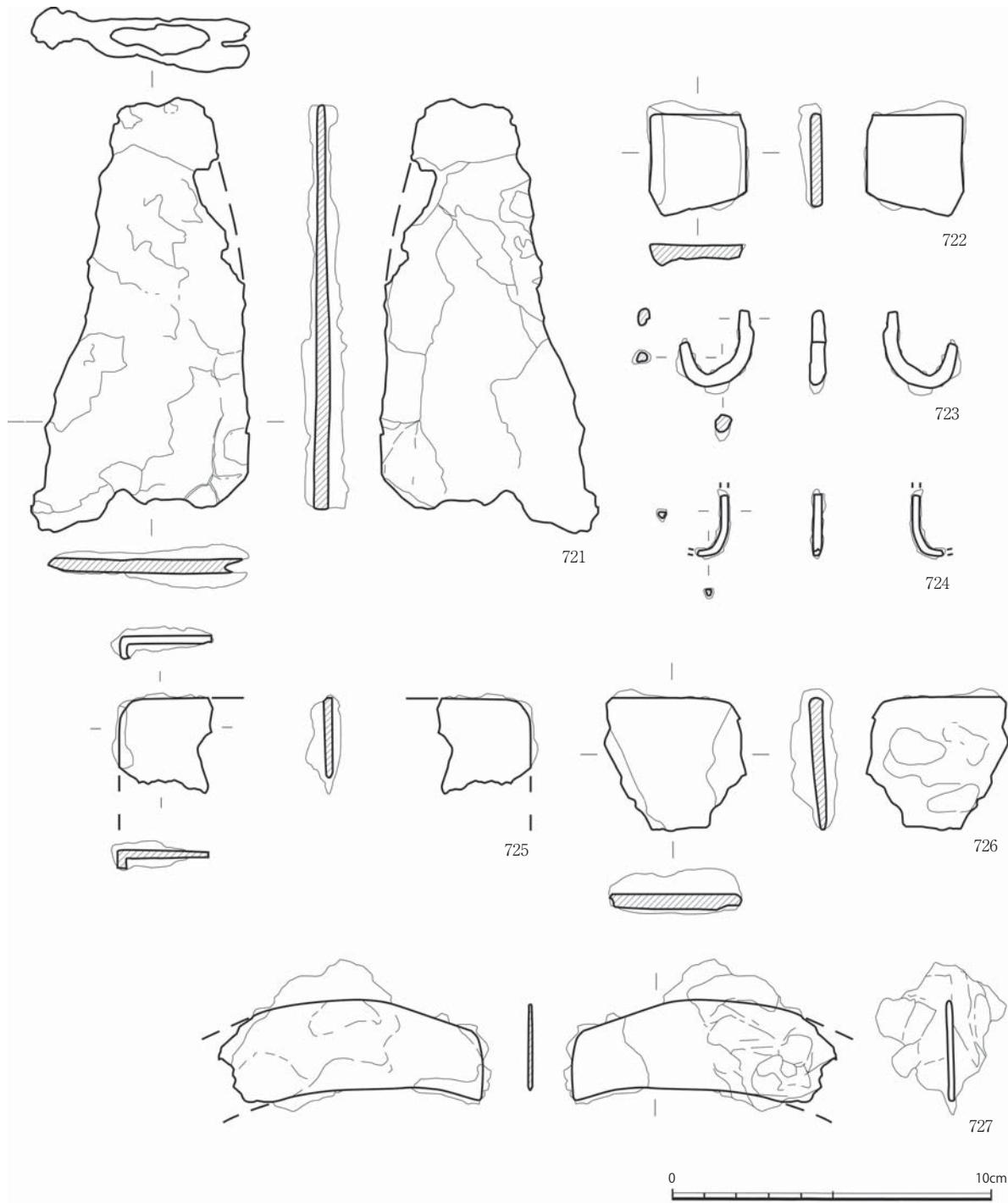


図123 原の辻遺跡出土鉄器（5）

これは外環濠に相当し、741が環濠出土のものであれば、弥生後期～古墳前期のものである可能性がある。出土地不明の742も板状鉄素材である。

743～747は棒状鉄素材と考えられるものである。744は1953年第2次調査の第2トレンチP区出土の棒状鉄素材で、鉄片が比較的多く出土とした地点から出土している。743や747も、1953年第2次調査第2トレンチ出土の棒状鉄素材である。原の辻遺跡の集落の中心に位置する1953年第2次調査第2トレンチは、多数の鉄片や棒状鉄素材が出土しており、鍛冶関連遺構が存在した可能性がある。なお、

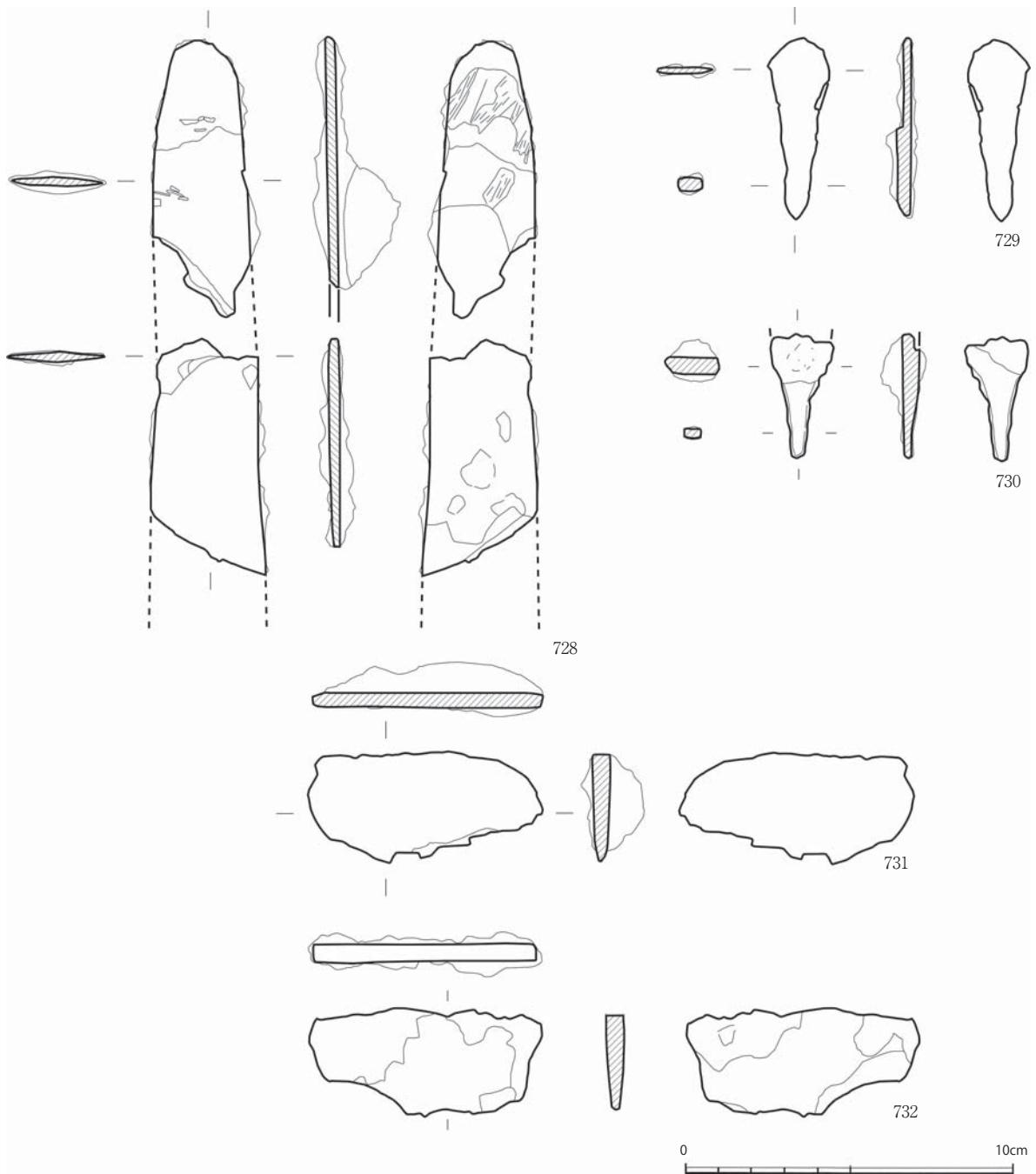


図124 原の辻遺跡出土鉄器 (6)

746は棒状素材と考えたが、第9章のX線CT調査などでは、先端が次第に厚みを減じており、鑄状の鉄製品である可能性もある。

3. まとめ

燕系の铸造鉄斧である鎌が出土している。弥生時代中期のものである可能性があり、細竹里・蓮花堡類型などの遼東から朝鮮半島北半で製作された铸造鉄斧（宮本2021・2023）がもたらされている可

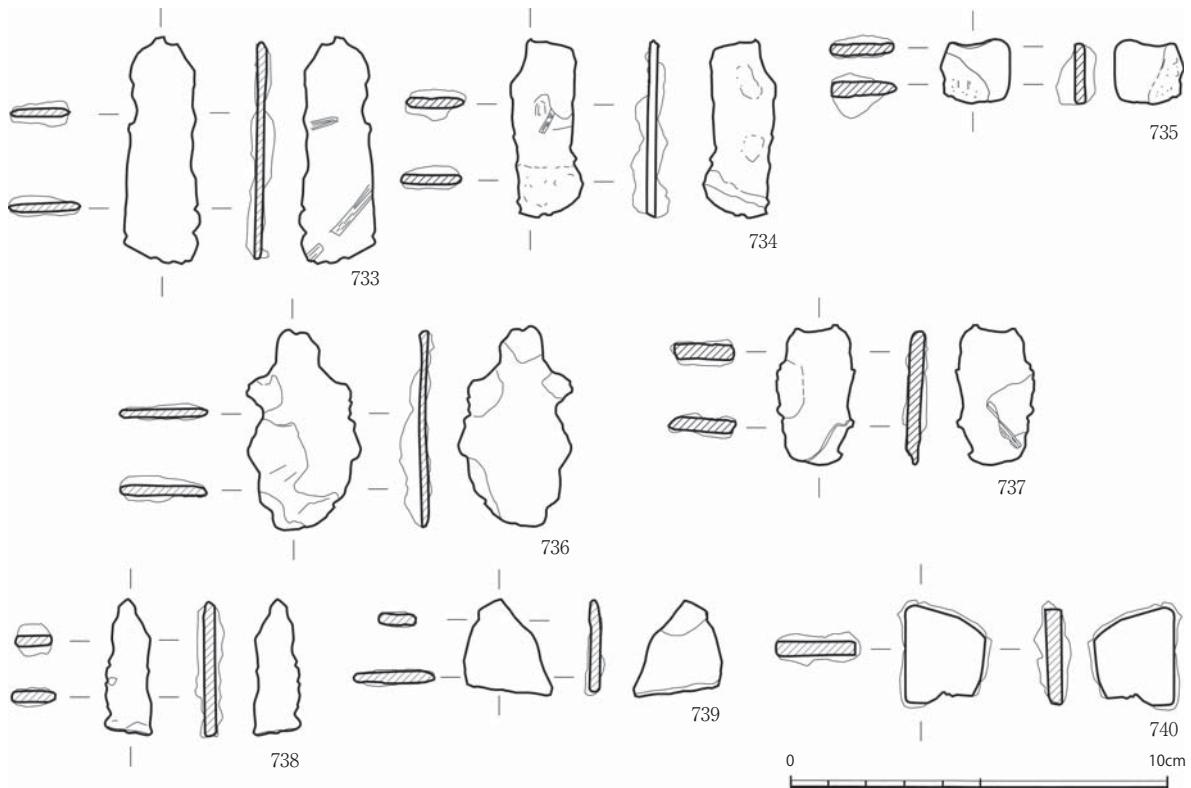


図125 原の辻遺跡出土鉄器 (7)

能性がある。原の辻遺跡では東周式銅劍の破片が出土しているように（福田2005）、朝鮮半島西南部の細形銅劍文化とともに、鑄造鉄斧が弥生前期末から弥生中期前半にかけてもたらされた可能性がある。その後、袋状鉄斧、鉄鋤、鉄鎌などの鉄製農工具は、弥生中期後葉以降から古墳時代前期の間で、原の辻遺跡内で鍛冶によって生産されたものである。また、農工具以外にも鉄製釣針が存在し、原の辻遺跡では、農耕のみならず漁撈活動もなされていたことが理解される。

1953年第2次調査第2トレンチのO・P区を中心に棒状鉄素材や鉄片が出土するともに、鉄器加工工具と考えられる叩石なども出しているところから、この周辺に鍛冶炉が存在していた可能性がある。1953年調査の第2トレンチからはこの他板状の鉄素材も出土しており、第2トレンチのような集落遺跡内部には鍛冶構が存在していた可能性が高く、鉄器の生産が行われていたであろう。比熱した砥石（図114-696、図版64-696）や金属器を加工する際にできる溝条痕をもった砥石（図114-695、図版64-695）が、1961年の第1トレンチの環濠内から出土している。こうした資料も（森2013）、集落内部での鍛冶による鉄器生産が行われていたことを示している。

このように、弥生後半期～古墳時代前期の鉄製農工具は、朝鮮半島からもたらされた鉄素材を基に鍛冶によって生産されたものである。一方、原の辻遺跡では鉄劍、鉄刀、鉄鎌などの鉄製武器も出土している。鉄鎌は形態からみて舶載品ではなく在地産である。鉄劍も厚さ3mmと薄く、国内産の可能性が高い。一方、鉄刀は脊が5mmと比較手厚く、精巧なものである。732は1961年第1トレンチS区の内環濠下層で出土しており、弥生中期のものである可能性がある。したがって、舶載品の可能性のあるものである。

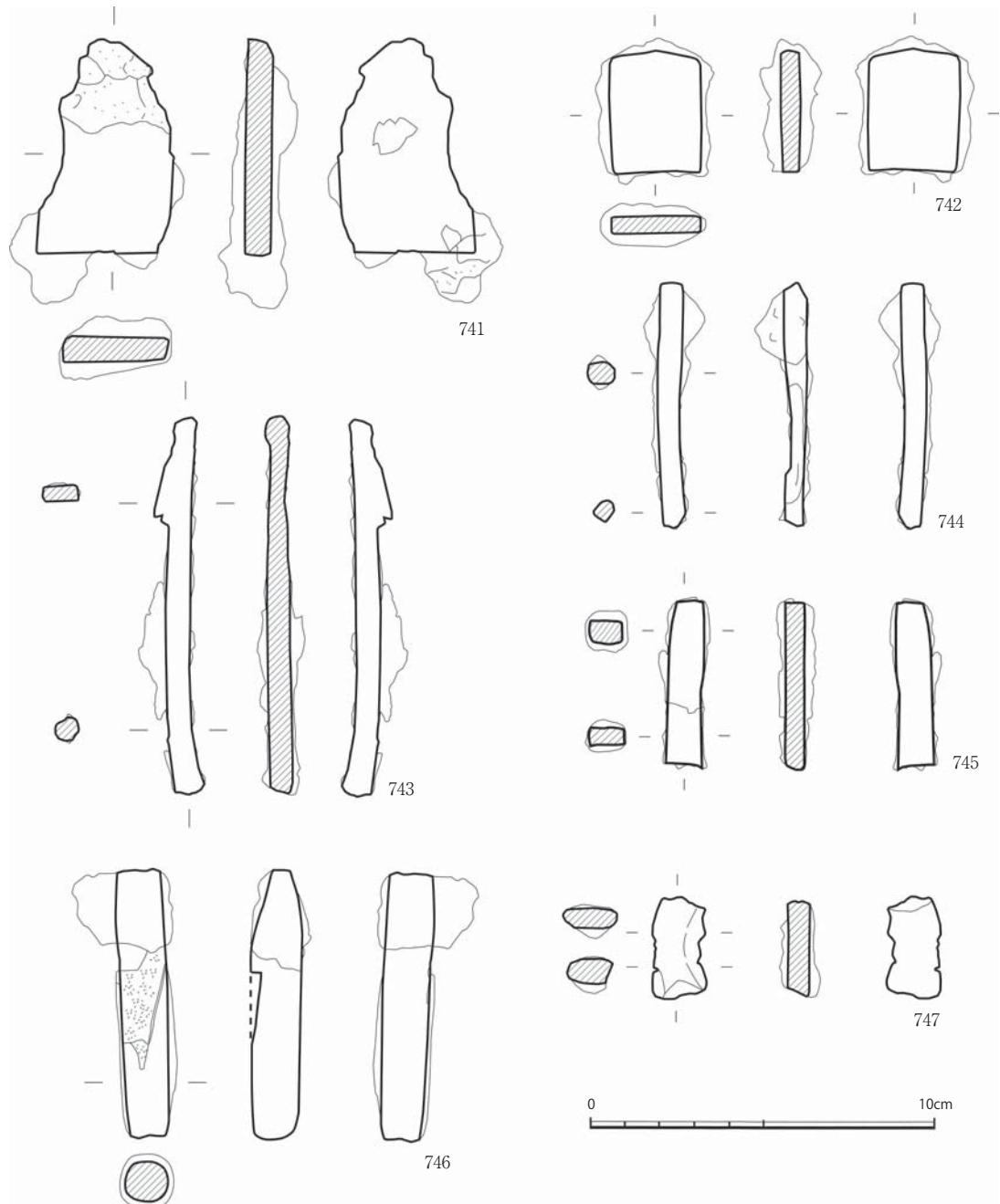


図126 原の辻遺跡出土鉄器（8）

参考文献

- 岡崎敬1956「日本における初期鉄製品の問題－壱岐ハルノツジ、カラカミ遺跡を中心として－」『日本考古学雑誌』第42巻第1号、14-29頁
- 川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 長崎県壱岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡－史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査－高元VIII区・原XV区・原XVII区』（壱岐市文化財調査報告書第1集）
- 福田一志2005「青銅器」『原の辻遺跡 総集編 I』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）179-189頁
- 宮本一夫2021「朝鮮半島における初期鉄器時代の始まり」『史淵』第159輯、37-84頁
- 宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣
- 森貴教2013「カラカミ遺跡出土砥石の検討」『壱岐カラカミ遺跡IV－カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査（1977・2011年）－』九州大学人文科学研究院考古学研究室、169-182頁